



LGBTのイベントに積極的に参加する浅沼さん。写真は昨年の「丸亀レインボーパレード」(浅沼さん提供)＝画像は一部修整しています

# 病院スタッフこそ理解を

読者

5/22

トランスジェンダーで看護師の浅沼智也さん(31)は、東京都内で高齢者の訪問看護をしている。「童顔で親しみやすいからか、他の人に話していない秘密を打ち明けてくれる患者さんもいます」とはにかむ。

10代で性同一性障害と診断され、23歳で性別適合手術を受けて戸籍を男性に変えた。病院勤務時には、トランスジェンダーの女性患者

者に対応したこともある。「入院中は氏名や性別が書かれたリストバンドを着けます。その方は本名が男性の名前でしたので、『手首と足首、どちらに着けますか』と聞きました。『見えにくい足首に着けましょう』ということになり、ホツとされた様子でした」

ケアが必要なのは患者だけではない。浅沼さんは女子短大を卒業後、性自認に沿って男性看護

師として働くことを希望。病院の救急部門に採用された。このことは、病院のごく一部の人が知らないはずだった。

ところが入職して1年以内に、院内のほとんどのスタッフにトランスジェンダーであることを知られ

ていた。当事者に無断で第三者が性のあり方を明かす「アウトティング」が行われていたのだ。「怒りや不安はありましたが、『まあ、いつかはなくなるだろう』と思っていた。でも、うわさ話が尽きなくて……」

酒の席で医師から「下半身はどうなっているんだ」と聞かれたり、廊下で「オネエさん」と呼ばれたりもした。浅沼さんは次第にふさぎ込むようになり、23歳でうつ病を発症。休職して回復を待ったが、その後、退職することになった。

現在は別の場所で看護師の仕事を続けながら、LGBTと医療について、医療関係者や学生向けに講演を行ったり、交流会を企画したりしている。「例えば、問診票に『呼ばれた名前』を確認する欄を作ったり、受付で渡した番号で呼んだ

りするなど、すぐできる」とはたぐさんあります」

特に、医療従事者に理解してほしいという。どんな人にも平等に接することが、誰より求められていると考えるからだ。浅沼さんのトランスジェンダーの友人の中にも、微熱が続いていたが病院へ行くことを極端に嫌がり、次第に症状が悪化して肺炎になったケースがあった。

「性的少数者がけでなく、障害のある方、性暴力の被害にあった方、何らかの困難がある方の声や要望を事前に知っておくことが大事です。知れば、いざという時に助ける。それがより良いケアにもなるし、命を救うことにもなります」

LGBT・レスビアン(女性同性愛者)・ゲイ(男性同性愛者)・バイセクシュアル(両性愛者)・トランスジェンダー(心と体の性が一致しない人の英語の頭文字を並べたもの



\*過去記事はミミドクターで

医療ルネサンス No.7290

LGBTと医療

4/5 7/46

受け入れへ備える大切さ

「LGBTの患者は、病院の対応に不満を抱いて来院しない人も多く、病気が悪化するケースがある」

研修医の話に、金沢市の城北病院院長・大野健次さん(61)は驚いた。病院では長年、「無差別平等の医療」を掲げ、取り組んできた。

しかし、LGBTの患者が、そのように思っているとは、考えたこともなかった。

この研修医の提案で、早速、学習会を開いた。講師の一人、桂木祥子さんは大阪のLGBT支援団体「QWRC(くおーく)」の理事。団体では、当事者が病院などで直面する問題点を整理し、関係者向けの冊子も作成した。

学習会当日、桂木さんに病院の中を見てもらった。男女とも使用できるトイレがあること、入院患者の病衣が男女兼用で色の区別がないこと、患者の同意なく

ベッドなどに氏名を表記しないこと——が良い点として挙げられた。

これらは性的少数者への配慮にもなる。職員からは「受け入れる気持ちだけでなく、体制作りも必要だと



坂井さんは「ALL Y (アライ)」の缶バッジを身につけている(亀田ファミリークリニック館山提供)

QWRC作成の冊子「LGBTと医療福祉」は無料ダウンロードできる。  
http://qwrc.org/2016iryoufukushiemyk.pdf

分かった」「LGBTを正しく理解していなかった」などの感想が寄せられた。

病院ではその後、職員向けのハンドブックにLGBTについて記載したり、手術などで必要な「家族の同意」の中に同性パートナーを含めたりするなど、対応の見直しを行った。

一方、千葉県館山市の亀田ファミリークリニック館山では、待合室に多様な性に関する絵本が並び、トイレには相談窓口の案内がさりげなく掲示されている。

診察室の医師の当番表に虹色のシールが貼られることもある。6色の虹は、LGBTの尊厳と社会運動の象徴として1970年代から使われ始め、今では当事者への支持を表すシンボルマークとなっている。

同クリニック医師の坂井雄貴さん(31)は「有志の職員で『ALL Y(アライ)』

と書かれたバッジを付けています。これを見て救われる患者さんもあると思うので」と話す。英語で同盟を意味し、LGBTの支援者にも使われる言葉だ。

坂井さんらの活動はクリニック内にとどまらない。地元の小中学校や市役所の講演も積極的に行う。虹のシンボルの意味などを説明する機会を通じて、LGBTをはじめとした、多様な性の啓発にもつながっていると手応えを感じている。

当事者が話をしなくなったのために、備えておくことが大切だと話す坂井さん。「医療機関は生きていく上で不可欠な存在。私たちは、LGBTの人だけを特別に受け入れているのではなく、誰でも来られる場所、自然な形でサポートできる場所にしたのです」

LGBT レズビアン(女性同性愛者)・ゲイ(男性同性愛者)・バイセクシュアル(両性愛者)・トランスジェンダー(心と体の性が一致しない人の英語の頭文字を並べたもの

くらし 家庭



# 様々な背景 思いはせて

## Q&A

LGBTと医療の課題について、現状に詳しい石川県立看護大学講師の三部倫子さんに話を聞いた。

——LGBTの人にとって、医療面での問題とは。

「医療現場で患者の性自認や性的指向がどう扱われているのかを知るため、昨年、3都県の病院の看護部長を対象にアンケート調査を行いました」

「その結果、①多くの病院で同性カップルは『家族等』として扱われていない②性別違和のある患者にとって受診しやすい環境になっていない③9割以上の病院でLGBTに関する研修が行われていない——」とが分かりました」

——「受診しやすい環境ではない」の具体例は。

「診察時にフルネームで患者を呼ぶ、名前など、トラ

石川県立看護大学 講師

三部倫子さん



2014年、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科了。サンフランシスコ州立大学客員研究員などを経て17年から現職。

「『年齢が多い病院なので気にしたことがない』『ニュースで見るが近くにはいない』などが理由でした」

——LGBTの患者はいないということですか。

「様々なデータから考えると、1日の患者が50人いる場合、2〜4人はLGBTの可能性があります。ただ、当事者は『異性愛者じゃない、性別は男女の二つだけしかない』とみなす社会の中で、人に言えずに苦しんでいます。やっと打ち明けても、拒絶された経験もあるでしょう」

——『当事者が医療職にしてほしいことを分かりやすく言ってくれるのを待つ』という医療者側の姿勢は、結局、マイノリティーがカミングアウトを強いられる構造の温存に加担しているのと同じです」

——「これからの医療現場に必要なことは何ですか。」

「偏見や差別を恐れて受診を控え、症状が悪化してしまうなど、社会的な障壁によってLGBTの人に健康格差があることは、これまで着目されてきませんでした」

「必要なのは、様々な背景を持って生きる人に、思いをはせることです。自分たちの思い描く性のあり方や家族形態と違うからといって、拒絶されることはあってはなりません。『自分のままでいて大丈夫な場所だ』と分かる環境や医療体制を作っていくことが大切です」 (李英直)

(次は「みんなでスポーツ・女性」)

LGBT レズビアン(女性同性愛者)・ゲイ(男性同性愛者)・バイセクシュアル(両性愛者)・トランスジェンダー(心と体の性が一致しない人の英語の頭文字を並べたもの)



\*過去記事は「LGBTドクター」